
神は俺を不幸にした.

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は俺を不幸にした・

【Nコード】

N8212X

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

「神と出会って不幸になりました」

神との出会い

俺は意識が戻る。ここはどこだ？人の声も車の音も聞こえない、目も重くて開けられない。

俺は確か、車に撥ねられそうになっていた子供を突き飛ばして助けようとして・・・あれ、その後が思い出せない。

思い出せるのは、俺はそんな人助けをするような人間ではなかったということだけだ。ふふ、一種の気の迷いか、それとも子供だったからか、と考えているとどこからか老人の声が聞こえてきた

「おい、聡史起きるか」

あれ、不思議だ。老人の声が聞こえたと同時に目が軽くなったぞ？
ん、誰だろう、と思いながら目を開けるとそこには

重そうな杖を振りかぶって今まさに俺に振り下ろそうとしている爺さんがいた

「どわあああああああ！！！！！！」

俺が横に転がって回避したと同時にすごい地響きがおこった。何事だ?!と今居た場所を見るとそこが粉々に砕け散っていた。

この爺さんどんだけ桁違いな力してんだ？！と思っていると、その爺さんが俺の方を向いて、にかっと笑いながらこう言った

「お主はもう、死んでおる」

ええー

何それどういう事？え、何で北の拳みたいな事を、見知らぬ白髪白髭のお爺さんに言われなといけないの？！

ちよつと待て落ちて着けミイ、クール、クール、クール、まずは相手に何者なのかを聞かなければならない

「えっと、貴方は何者ですか？」

「ん、ワシか、ワシは神じゃ」

「へえ、そーなんだー（棒読み）」

「何故、棒読みなのじゃ！」とすごい剣幕で怒っている神を無視しながらこの空間から脱出する方法を考える。考えてみて「神」とやらに聞いてみるのが良いと、思い立ったので「神」に聞いてみた

「なあ、神。」

「それは、神に対する態度なのか？と、思っのじゃが言ってみ」

「こつから出るにはどうすりゃ良いんだ」

「それはな、お主の意識の中にこれからわしが住んでもいい、とお主が誓えばよい」

なんだ、そんな簡単なことか、と思いながら俺は誓った

「よし、これから神が俺の意識の中に住む事を許可しよう」

「・・・まあ生き返らせてやろう」
と神は言った。

そして、光った、ええ！？と思っている内に俺の中に光が入った。
そして世界が暗転した。

はっ！、と気がついた時、俺は、ユリの花の匂いに包まれていた
・・・まさか、まさかそんなタイミングで生き返ったんじゃないよな。生き返ってないと信じたかったが俺は、‘ふた’を持ち上げて外を見るとそこは俺の葬儀場だった。

それを、見た瞬間込み上げてきた言葉を空に言い放った

「この、糞神がああああ！！」

幼馴染と神と俺と

：朝 家

神、と生き返る為の取引をしてから一週間。

俺は、激動の時代を生きたかのように疲労困憊している。

神の生き返らせるタイミングの悪い事、俺は棺桶に入れられた直後に、生き返ってしまった。そのせいで新聞には、「棺桶に入れられた直後に生き返った奇跡の少年！」などと書かれ、さらには、テレビにも引つ張りだこで、ここ五日間全く寝ていない。

俺は、「芸能人って、テレビに出て楽しく騒いであって、金ももらえる楽な仕事」だと思っていたので、「岡 は、なんで鬱なんかなったんだろう？」と、とても失礼な事を考えていた自分を恨んだ。

今なら分かる、こんなにもつらい仕事をしていれば鬱になる、と。

だが、無情なことに学校は行かなければならない。俺が行っている学校は、カトリック系の学校で、不良なんかはいない、みんな偉いたいして事件も起きない、俺の生き返りを除いては。

（おーい、聡史。聞こえておるか？）

うおっ、何だこの頭の中に響いてくる声は！・・・ってな。

この声には聞き覚えがある。この忌々しい声は・・・

「ちっ、くそじじいか」

おそらく自分にしか聞こえない声であろう、という声で呟いたはずなのに頭の中に返事が返ってきた

（クソじじい、とはなんじゃ！別に寿命を縮めたっていいんじゃないぞ！）

またでたよ。寿命を出して脅すの

「てめー・・・寿命で人を脅すのなんか神じゃねえんだよ！何か、言い訳があるなら言ってみろ！」

（・・・）

あつ、認めた。

俺は、神を言い負かした優越感に浸りながら、学校の制服に着替える。ちなみに、学校の制服は普通のブレザータイプ、どこまでも普通だ。

俺は眠い目を擦りながら階段を下りて、軽い朝食を作り、一人で食らう。

俺の家族は3人家族で、俺、母さん、父さんの3人で構成されている。父は超スーパースター、母は超美人、俺は・・・頭はかなり父親の血が入っていて、外見は・・・残念な事に母の血がちょっと入った感じだ。

みなまで言わせるな。

そんな事を、考えながらスクールバッグを担ぎ、家を出た。

・登校の道

「おっはよ～～！！」

うおっ！俺は、突然後ろから来た何かのせいで、前のめりに倒れた。「いつてえ」と、言いながら後ろを見ると、えっへえ～～という効果音が聞こえてきそうな笑顔を浮かべる、幼馴染の姿があった

「おい、佐奈。お前いい加減やめろつて。」

「いいじゃんか。けち」。あつ、そうだ聡史・・・

「何だ？」

（おい聡史。今から、その佐奈というやつはお前にとびつ・・・）

「ん？何だ」

神に聴いた瞬間、佐奈が俺に飛び掛ってきた

「I LOVE 聡史！！！」

俺は華麗に避けた

「ぎゃーーーー」

なさけない悲鳴をあげながら飛んでいく佐奈。

それを、無視して俺は学校へ行こうとした所を神が叫んだ

（おいっ！いいのか本当にいいのか！？）

「いいんだよ、どうせ士郎のところに飛んでいくんだから」

（士郎というのは誰なのじゃ！というか普通見捨てんじやろうがー！）

「もういいから！」

結局、俺は学校に遅れた大遅刻だった。

：放課後

「おーい、聡史。一緒に帰ろ。」

今は、授業も終わった放課後。俺は佐奈と一緒に帰る約束をしていたので、一緒に帰るところだ。

今日よりひどい日は無かっただろうと思う。授業中、ずっと神が、（こんなのも分からのか）だの（それは、違う！）だの、ずっと言ってきて最終的に、「おんどりやあ、黙ってるー！ー！！！」と、叫んでしまい、クラスの皆から白い目で見られた。

俺が、返事しなかったのが不満だったのか、佐奈が、ローキックで俺の脛を蹴ってきた

「痛っ！分かったからやめろ！」

「ええ、まだまだ蹴ってたかったのに」

「お前、本当に俺の事が好きなのか！？」

本当によく分かんやつだ。

俺が佐奈とじゃれあってると、前からもう一人の幼馴染、士郎が来た。

士郎とは、佐奈と会う前からの幼馴染で、一言で言う運動部のイケメンだ。そんなのが、こちらにすごい顔で、すごいスピードでダッシュしてきた。

「部活を作ったんだけど、はいつてよー！」

はっ？と、思った瞬間、士郎はダッシュの勢いを殺さずに完璧なパ

ンチを、俺の鳩尾に決めていた

「なっ！き・・・きさ・・・ま、お・・・れ・・・を裏切った・・・なあ」
その一言とともに俺の意識は、地の底へ落ちていった。

幼馴染は俺を部屋に連れ込んだ

「……」

俺は、鳩尾の辺りにある不快な痛みで目が覚めた。

目を開けるとそこには、佐奈の顔があつた。しかも、零距离で。

「ぬうおう！」

「あつれ、起きちゃった？」

「『あつれ、起きちゃった？』じゃねえよ！ お前今何しようとした」

俺の予想が正しければ、こいつは今俺にキスをしようとしていたに違いない。絶対にそうに違いない。

だが佐奈は、俺の予想の、右斜め上の答えを言った。

「んっ？ ああ、土郎に教えてもらった スターダストプレス を、どこに決めようかな？ って思つて、狙いを定めてたの」

「眠ってるいたいけな俺に、何しようとしてんの！？」

本当に危ない！！ と言うか スターダストプレス できんの！？ ちなみに、 スターダストプレス とは、難易度の高さと、危険度から幻の技と呼ばれるものである……あれ？ 今、頭の中で勝手に説明が流れた様な？

（よう。前回、超疎外感を感じた神だ。）

ちっ、またジジイか。と、神に文句を言おうとした時、俺は神の口調が変わっている事に気がついた。

（お、お、お、おお！ 気が付いた？）

（黙れ、くそジジイ）

（相変わらず酷くない！？）

う……っ、う……っ、もう元に戻すわ……うう。と神が嘆いている間に、俺は、今いる 部屋 を眺めた。

俺は学校の事については人一倍知っているつもりだったのだが、この部屋は見た事がなかった。

まず、壁、床、天井、全てコンクリートがむき出しだ。

だが、ソファやテレビ、エアコンにゲーム、ラノベにパソコン、さらには、部屋の隅にトイレの個室みたいなものがある。

十分ここで暮らせていけそうな設備が揃っている。

「おい佐奈。ここはどこなんだ？」と佐奈に聞こうとした時、部屋の入り口から（横にスライドさせるドア）士郎が入ってきた。

士郎とは、俺の幼馴染で佐奈と知り合う前からの付き合いだ。

……俺とは違い、すごくイケメンだ。

くそっ！ 何で俺はこんな普通で、こいつらはルックスが良いんだ！
自分で言ってる何だか悲しくなってきた。あつ、ちょっと涙が……

ガラガラッ

何だ？ 人がすごく悲しくなっている時に、と振り返るとそこには、士郎がいた。

「ああ、起きたのかい聡史」

「うおらあ！！！」

「あつ、こんな所に佐奈がいる」

スカッ

「……」

なん……っだつ……て。俺の長年の恨みがこもったハイキックを避けただと！？完璧な不意打ちだったのに、と俺は驚愕した。

「おい、椎名」

「何ですか？」

「三話目あんま進んでなくね」

「そうだね」

沈黙

「何、この付録いらなくね!？」
「」

続く

恐ろしい部活内容

「さあさあ、部活をはじめようじゃないか」

「ちよっ……ちよっと待て、展開が速すぎて追いつけないんだけど」
「ん、そうしょー」

俺は今人生の岐路に立たされている……と言っても過言ではない。
今しがた俺はこのボランティア部の部員になった……らしい。

あ、この部活がボランティア部だったってことは、今さっき分かったばかりだ。

「じゃあ部活しよう。あ、部活はじめよう」

「もっ……いいよ。本当にもついいよっ！」

負けた。心が折れた。こうやって押し切られるのは今に始まった事じゃない！ 頑張れ俺。

「じゃあ、この部活の内容を教えるね」

「ああ」

「ん」

ボランティア活動をするんだろ。と、心の中で毒づく。

「この部活の内容は……ボランティア活動をする事です」

やっぱり。

「それ、と」

おお、続きがあった。

「背中を押してあげる部活です」

はあああああつつつつっ！？

「意味わかんねえよ！」

ガチで意味わからねえ！ いやつ、もう分からないの域を越してるね。

何ですか？ 恋愛事情でも助けるんですか？ もうこれだとスケツ

○ダンスのスケツ ○団と同じだよ！

「ああああ、今からその意味を教えるからそんなに興奮するな」

と土郎が、うざったいなあという表情で俺をなだめてきた。

いやつ、興奮せすにはいられないだろ。

同じ立場になって考えてみてよ。ありえないだろ。

と、ここで士郎が説明するときの体勢に入っただので、ひとまずソファーに座る。

「まあたとえていえば、恋愛事情など困っている人の背中を押してあげます」

予想どおり。

「そして……自殺しようとしてる人がいたら、その人の背中を押し
てあげるのがこの部の役目です」

.....

「へえそうなんだ」

[illegible]

「ありえねえええつつつ！！ 受け入れんなよ佐奈あああつつ！」

こいつらああつつつ！ 真の馬鹿なのか！？ いや、馬鹿でもこ
んな事しねえよおお。

「ねえ犯罪行為だろう？ お前らどうかしてるぜ！ もう退部するわこんな部活！」

こんなの部活じゃねえよ（泣）

そして俺はドアに向かってダッシュした。

タタッ
(俺がドアに向かって走る音)

グブツ（俺が急にドアをあけて入ってきた人にぶつかる音）
ササツタツタツ（その人達が絨毯を素早く敷いて去っていった音）

「……つつつ！」

あまりの鼻の痛みに声にならない悲鳴を上げながら、また立ち上がった。

士郎は馬鹿にしたような目で俺の事を見てきて、佐奈は写真を撮っている

こんな状況で心が折れない俺、強いぜっ！

そして走り去ろうとした時。

シュツとドアが開いた。

「あの、この部にお願ひしたい事があつてきました」

なんとという間の悪い時に来たんだああつつつ。

俺は一生恨む、神を

（なんでわしーーーーー！？）

初依頼人の依頼内容

：部室

俺と、士郎と、佐奈と、神は、いましがたこの部に頼みたいことがあるという少女を目の前にしている。

漆黒とかいう形容が似合う髪に、小学生と言われれば納得してしまいそうなほどの童顔、さらに背は145cmという、見た目は完全に小学生……この言い方には完全に語弊があつた、胸だけ除けば小学生にも見える少女だ。そのせいかさつきから佐奈は少女の胸を見て、自分の胸を見てため息をついているし、士郎は完全に口説きモードで対話している。

まあ、それはいい。百歩譲ってそれはいい。俺にとって一番問題なのは……

「何であんた見えてんだよおおおおおッ！」

そう、俺の意識の中にしかないはずの神が今目の前にいるのである。

服装もザ・神、って感じの服装だし、例によってあのバ力でかい杖も持っている。

なのにこいつらは全く気にもしない、そしてなぜか俺のほうを「何で急に叫んだの？」という感じの目で俺のほうを見ている。

「何でお前らこのクソ爺のことつっこまねえんだよ！」

「え、聡史の知り合いじゃないのかい」

「聡史の知り合いだと思ってたなあ」

「……………」

こいつら天性のバカだ。と聡史は思った。

「まあ、一応紹介ぐらいしてくれないかい？ 聡史」

「そうだそうだー」

「……はあ、分かったよ。こちらは……えっと、あー、神様だ」

「そうじゃ、わしは神じゃ」

「ふうん、神様なんだあ。よろしく」

「へえ、これが神様か、よろしくお願いします。まあここで話を戻そう、今回の依頼はなんだ……」

「ちよつと待てえええええええッ！」

そう叫ぶと佐奈、士郎、依頼人の少女はまた、「何で叫ぶの？」という表情で俺を見てきた。

「いやいやいや、お前ら何ですんなりと状況を受け止めた？ 神って言ったんだぞ俺は。なのにどうしてそんなに簡単に受け止めた？」
「はあ……僕たちはまだこの人の名前も知らないんだぞ？ 少し黙つてろ」

俺は、えーと呆然としながらソファーに腰を落ち着けた。そんな俺をよそめに神は「こんなにも物分りのいい奴らがおったんか！」と丁度テレビがある隅のほうに行つて泣いている。

いやっ、もうこいつらのバカさ加減は筋金入りだな。と思った。

「はあ……やつと本題に入れるな。あなたのお名前は何ですか？」

士郎が少女に名前を聞くと、その少女は少し恥ずかしそうに目を伏せながら静かに声を発した。

「えっと……く、来実です。よ、よろしくお願いします」

「じゃあ、今回の依頼内容はなんでしょう？」
「わ、私。やつちやいたい人がいるんです！」

俺達がそれを聞いた瞬間、士郎は両方の鼻から鼻血を吹き出し、佐奈は柄にもなく顔を少し赤くしてなぜか俺のほうに熱っぽい視線を浴びせてくる。

もちろん、俺は何にもなっていないぞ？ 勘違いしないでくれ、俺はこいつらとは違うからな。

「お、おい聡史！ お主鼻からおびただしい量の血が出ておるぞ？」

「……なっ、何じゃこりやあああああッ」

お決まりのセリフを叫びながら俺は茫然とした。お、俺がこんな奴らと、こんなバカどもと同じなんて！

と、士郎がまだ鼻から血を出したままで、その少女 来実と向き直った。

「えっと、ですね。それはどんなシュチュエーションが好みでしょうか？」

「えっ……？ あ、えーと人ごみとかですかね」

「「「！？」」「」」

「えっと、なぜ皆さんそんな驚いた顔をされているのですか？」

「い、いえ、そうですか。格好はどんな感じがいいのでしょうか？」

たとえばメイド服なんかでしょうか？」

「え？」

「そ、それとも裸エプロンですか！ それとも拘束具ですか！」

「え？」と来実は不思議がっていたが、士郎が何を聞いているかを察し、顔から湯気が出そうなほど真っ赤になった。

「ちっ、違いますよ！
殺^やる『ですよ！』
そういう『やる』ではなくて、こっちの『

と、言いながら空中にナイフのようなものを描き、それを掴んでものに突き刺すそぶりをした。

「え？ えええええええええええッ！」「」

「お主ら何を想像しとると思えば、とんだ変態じゃのう」

「あんた来実さんは『人を殺すお手伝いをしてください』、って言うてんだぞ!? よくもまあ、そんなのんきでいられるな!」

「うむ、わしならそんなこと容易じゃからなあ」

「え？」

続
く

初依頼人の依頼内容（後書き）

これから時間があるときはこれも続けようと思ってるので、遅くなりましたが、お読みいただければ幸いです。

やっと目立った神

「『ええっ!?!』」

俺が驚いたキツカリ五秒後に俺以外　　士郎、佐奈、来実が素っ頓狂な声を上げた。

そのまま硬直すること十秒、士郎たちはあり得ないという表情で神を見つめた。

「何じゃお主ら、わしの言うことが信用できんのか」

「『うん』『うん』」

「お主ら酷いのう、さっきはあんなにすんなりわしが神であることを受け入れたではないか、なのにどうして不思議そうな顔をする?」

神がそう言うと、（あ、俺知らない間にジジイって呼ばなくなってる）士郎たちは呆れた顔で互に見つめあった。どうやらまだ信用できてないらしい。

「お前らこいつが神ってさっき受け入れたよな?」

「お主わしのことをこいつ呼ばわりしよったな!　いいか覚えておくんじゃぞ!　お主にどんな災難が降ろうとわしのせいじゃないぞ

!　本当に覚えておくとつ　」

「ふん」

「ぐぶうっ!」

神のお小言がまだ続きそうだったので、思いつきり神の鳩尾を蹴り飛ばした。うゝん、改めて考えるとこれ神への扱いじゃないよな、まあいいか、もともとコイツのことを神と思ったことはないし。

神は俺の蹴りに悶絶して床をのたうちまわっていた。うん、ほつとっ。

「とりあえずさあ、最初受け入れたときはどう思って受け入れたんだ？」

俺がこう聞くと、士郎は「それを言わせるかあ？」という呆れ顔になった。

……うーん、イケメンは何をやっても様になるなあ。呆れ顔が決め顔に見えてくる。……さすがにそれは無いけど。べ、別に褒めるわけじゃねえし。

「んで？ どう思って受け入れたんだ？」

「聡史の古い友人」

「どうしてそうなる！？ じゃあ、こいつの歳はどんくらいに見えるんだよ！」

と、俺はまだ床にのた打ちまわっていた神の髪の毛を掴み……別にギャグじゃないよ。そこらへん勘違いしないでね。それを引っ張り上げて神を無理やり立たせ、士郎の目の前に神の顔を見せつけた。神の髪の毛ってさっらさらしてるんだな。うーん、新発見。

「ほら、どうなんだ。これが俺と同年に見えるか？ え？」

「うーむ、士郎の古い友人だとすると……ざっと、十七歳ぐらい？」

「このしわくちな顔で！？」

「もちコース」

「俺こんな古い友人持つてねえから！ というかお前、俺が老人嫌いな知ってんだろ！」

と、神の顔をブンブン前後に振って、俺は士郎に猛然と抗議した。

が、そんな俺の様子を気にすることもなく、士郎は言葉を続けようとした。

……これが友達に対する態度なんだろうか、こいつの心はエイリアンよりも冷酷だな。

「……………聡史……………もう、ギブ……………アップ……………じゃ」

あ、神のこと忘れてた。ちなみに士郎に抗議している間も、神の顔を前後にブンブン振り続けていた。完全に衰弱しきった神に十字架を切ってから　激しくソファーに叩きつけた。

「ぐぼふうっ！……！！！」

気にしない、気にしない。俺は気持ちを切り替え士郎に向き直った。もちろん神は放置プレイ。何でも切り替えが大事だね。いい言葉だよ、切りかえって。

この間ざつと二十秒。俺が神をソファーに叩きつけるのを見届けてから士郎は言葉をつないだ。

「まあ、古い友人と思ってたのは確かだ。違うのかい？」

「当たり前だろ！」

俺は仕切りなおすように怒鳴ってから、

「あのな、俺この前死んだだろ？」

「……………」

士郎は急に顔を俯けた。まあ、さっきの話からこんな重い話になるとはだれも思わないからな。実際大して重くないんだけどな。

「その時生き返らせてくれたのが」
「わしじゃ！」

突如。

俺の顎にアッパーカットを決めた神が、その老いた体を俊敏に動かし、吹っ飛んだ俺の鳩尾のあたりに乗っかってきた。

さすがに士郎もこの俊敏さには驚いたらしく、「え？」と間の抜けた声を出していた。

……というか痛つてえ！ やべえ、神の力つてやばいの忘れてた！
！ というか重い！ すさまじく重い！ タンクローラーでもこんな重くねえぞ。

「どけ！ 糞ジジイ！」

「それが神にものを頼む態度なのか？」

ぐわああああッ！ うぜえええッ！ だが、仕方がない謝らな
いと死ぬう！

俺は神に対しての敗北感に打ち震えながら切実な願いを込めて『
3年B組金〇先生』のワンシーン風に謝った。

「お願いします！ どいてください！」

一瞬の沈黙

「やあなこつたあ（¥ ^ ^ /）」

そしてこのまま俺は意識を失った。

以下余談。佐奈がこの一連を見ている途中、依頼人・来実に「ま

た明日来てくださーい」と言っ て来実 に帰っ てもら い、そのすぐあ
と 佐 奈 も 帰 っ た。そし て、気 を 失 っ た 俺 の こ と は、土 郎 が 担 い で 家
ま で 連 れ て 帰 っ て く れ た ら し い。神 は、土 郎 が 俺 の こ と を 担 ぐ そ の
一 瞬 の 隙 を つ い て 消 え た ら し い。

こ ん な グ ダ グ ダ で い い の か と 思 い つ つ も、続 く。

・ 付 録

作 者 と 土 郎 の 対 話。

（ 作 者 ） 「 次 は、絶 対 に 依 頼 の こ と に つ い て 触 れ て ね 」

（ 土 郎 ） 「 も ち ろ ん さ あ ！ 」

（ 神 ・ 聡 史 ） 「 や っ ぱ い ら ね え よ、こ の 付 録 ！ 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212x/>

神は俺を不幸にした。

2012年1月5日19時52分発行